

屋久島瀬物一本釣り地域プロジェクト改革計画

熊毛支庁林務水産課

【背景・目的】

瀬物一本釣り漁業は、屋久島の基幹漁業であるが、現在、個々に操業している3経営体3隻について、漁業情報及び漁場探索の共有、遠方漁場の開拓、氷の融通、ムロアジ活餌の融通等について共同操業を行うことで、操業の効率化を図る。

また、遠方の新規漁場開拓と航海日数の長期化に対応した省エネ型の船型と省エネ機関を搭載した改革型漁船1隻を導入し、漁業コストの削減を行うとともに、強制循環型魚艙を採用することで、経営の主幹となるモジャコの生残率を高めることで、操業の効率化を図る。更に漁労作業の省力化、乗組員の安全確保及び労働環境の改善を行う。

このように、協業化と改革型漁船の導入により、これまで当該地域で行われていなかった取り組みを行うことで、地域のモデルケースとなりうる操業形態を確立し、収益性の向上を図る。

【普及の内容・特徴】

平成28年4月に改革漁船9.7トンが進水し、同年6月より改革計画の実証事業が開始された。検証期間は5年間を予定している。

- | | |
|-----------------------|-------------|
| 1 協業化 | 2 改革漁船の導入 |
| ・漁場探索の協業化 | ・省エネ機関等の導入 |
| ・遠方漁場の開拓 | ・強制循環型魚艙の導入 |
| ・氷及び活餌の融通 | ・釣り機の増設 |
| ・アンカー巻上げ機の導入 | ・労働環境改善 |
| ・乗組員の安全確保（新型レーダーの設置等） | |

【成果・活用】

実証2年目を迎え、改革型漁船を中心に水揚金額は実証前の156%と増加した。

また、燃油使用料は12%削減することにより経費率も下がっており、操業の効率化、省コスト化が図られている（表1）。

さらに、漁場探索や情報共有に加え、新型レーダー等の設置により、安全性の確保が図られ、各船とも操業時において、心身ともに楽になったことが大きいとの感想も聞かれた。

漁場探索の協業化及び80マイル以遠の遠方漁場の開拓については、小型船1隻（4.8t）は遠方漁場への出漁ができなかったことから3隻による共同操業は実施できなかったが、大型船2隻（9.9t，7.9t）による共同操業は実施した。

しかし、近隣漁場では3隻による情報共有等は常に図られており、各船の漁場選択に効果を発揮している。

また、改革型漁船の魚艙の断熱強化により貯氷能力が上がり、3日間程度で溶けていた氷が7日間持つようになったが、遠方漁場への出漁が計画を大きく上回ったことにより氷使用量も増加したため、実証前の16%増となった。

モジャコ漁業で利用する強制循環型魚艙の導入については、モジャコの収容密度及び運搬尾数を増加させる機会がなかったものの、収容中の斃死が発生しなかったことから導入の有効性が実証された。

各取組においては、ほぼ計画どおり進捗しているように思えるが、検証期間は5年間となっており、今後も事業のコンセプト、実証事業の目的を明確にし、計画どおりに実証ができるよう取り組むことで、操業形態の確立、収益性の向上を

図っていきたい。



写真1 改革型漁船

写真2 釣り機及び強制循環型魚艙

表1 実証前と実証開始後の水揚量及び水揚金額、燃油使用量

		実証前 (H21-25) 5中3平均値	1年目 (H28)		2年目 (H29)	
				増減		増減
甲船(9.9トン) (改革型漁船)	水揚量(トン)	13.1	16.9	29%	12.7	△3%
	水揚金額(千円)	13,235	27,921	111%	20,239	53%
	燃料使用量(ℓ)	20,993	20,930	△0%	21,589	3%
	氷使用量(kg)	31,272	36,423	16%	36,395	16%
乙船(7.9トン)	水揚量(トン)	3.1	5.9	90%	6.1	97%
	水揚金額(千円)	4,460	5,916	33%	8,573	92%
	燃料使用量(ℓ)	16,387	13,339	△19%	13,801	△16%
丙船(4.8トン)	水揚量(トン)	6.1	5.5	△10%	4.0	△34%
	水揚金額(千円)	6,992	11,795	69%	9,598	37%
	燃料使用量(ℓ)	15,924	15,542	△2%	11,529	△28%
3隻合計	水揚量(トン)	22.30	28.30	27%	22.80	2%
	水揚金額(千円)	24,687	45,632	85%	38,410	56%
	燃料使用量(ℓ)	53,304	49,811	△7%	46,919	△12%